

子規會誌

一五四号

平成二十九年
七月

平成二十九年 度松山子規會總會…………… 事務局 …… 一

東洋城からの霽月への書簡…………… 中野匡子 …… 七

明治二十八年の子規…………… 松浦卷夫 …… 一七

子規の新体詩…………… 今村 威 …… 二九

地域文化活動助成金贈呈…………… 事務局 …… 三八

松山子規會の皆様へ…………… (ボストン大学)キース・ヴィンセント …… 三九

【短信】…………… 編集部 …… 四一

例会記録

○平成二十九年四月例会(第八九一回)

四月十九日(水) 子規記念博物館 出席者四九名
副会長 今村 威

講演「子規の新体詩」

冒頭で、子規は新時代に相応しい詩の探究を目指していた事実を指摘。藤村を頂点とする当時の新体詩壇を批判し子規自ら作詩した経過を説明。明治二十九年作の「音頭の瀬戸」や「父の墓」の解説を通して子規の新体詩の特徴を、押韻の試み、叙事詩の多いこと、日本の詩歌の発展を考えたことを究明された。結びとして、「花売る歌」が女声三部合唱に作曲され平成十九年に松山で初演されたことを紹介された。

○平成二十九年五月例会(第八九二回)

五月十九日(金) 正宗寺本堂 出席者三四名
坊っちゃん会顧問 高村 昌雄

講演「はて知らずの記」と子規文学碑」

長年の、全国各地の子規文学碑探索の体験を基に「はて知らずの記」に関わる文学碑を紹介。子規の行程やコースに従い子規の足跡を辿りつつ文学碑を探索。子規が訪れた状況、句碑建立の経緯や場所等を副碑や説明板も加えて詳細に紹介。資料として碑の分布図やカラーによる画像、加えて自らの画による三十数編の「イラスト」資料も提示された。東日本大震災による状況の変化の追跡調査も周到に準備された。

○平成二十九年六月例会(第八九三回)

六月十九日(月) 正宗寺本堂 出席者三五名
編集副部長 佐伯 健

講演「子規の常盤舎舎友佐伯傳藏」

子規の友人・佐伯傳藏(蛙泡)の生涯と俳句等の文芸活動について、常盤舎での活動を中心に説明。傳藏を初め子規や霽月の自筆資料を解説し、多くの資料を活用して内容を構成。傳藏は常盤舎の文芸グループ(紅葉会)に参加、狂歌・狂句を得意としつつ俳句にも親しみ、子規から高く評価された。兵役後は実業界に転進、写実的な句も多く作ったことを紹介。傳藏の子孫(孫)の立場から、その諸趣味のある人間像や交友関係を鮮明に提示された。

例会案内

○八月例会 平成二十九年八月十九日(土) 正宗寺本堂

講演「三津の俳諧」

卓話 「子規から茂吉へ(上)」―「竹の里歌」に出会い

子規の弟子を志す― 会員 山上茂次郎

○九月例会 平成二十九年九月十九日(火) 正宗寺本堂

講演 「子規との不思議な縁(えにし)」―生誕百五十年

に寄せて― 子規研究会主宰 正岡 明

○十月例会 平成二十九年十月十九日(木) 正宗寺本堂

講演 「業余俳諧、村上霽月と子規、漱石の交遊」

評議員 二神 將

卓話 「子規作「発句経警備品」の中の漱石・極堂」

副会長 今村 威將

平成二十九年 松山子規会総会

事務局

平成二十九年 松山子規会総会は、四月十九日(水)午後一時三十分より、会員四十九名が出席して松山市立子規記念博物館の視聴覚室において開催された。

なお、総会に先立って、午前十時より同館会議室において役員会が開かれ、総会に提出すべき議案を審議、すべて原案のとおり承認された。

【総会次第】

一 会長あいさつ 井手 康夫

二 議題

(1) 平成二十八年 事業報告 高川 武彦

(2) 平成二十八年 度会計収支決算報告 森 慎吾

監査報告 福井みどり

(3) 平成二十九年 度事業計画案 高川 武彦

(4) 平成二十九年 度会計予算案 平岡 英

(5) 「松山子規事典」の出版について 森 慎吾

① 内容・編集作業ほか 平岡 英

② 予算及び今後のスケジュール 平岡 英

③ 宣伝・販売など 烏谷 照雄

三 その他

*引き続き、第八九一回例会

講演「子規の新体詩」

今村威副会長

【開会あいさつ】(要旨)

松山子規会会長 井手 康夫

本日の総会開催に当たり、ご多用のなか多数の方々のご出席いただき心より感謝申し上げます。本年度は、長年の懸案であります「松山子規事典」の刊行に向かって、いよいよ最終段階に差し掛かっており、担当者を中心に編集作業を続けているところであり、販売につきましても事務局において鋭意検討を重ねている状況です。皆さんの一層のご協力をご期待申し上げます。

本日の総会においては、会計報告や予算案、事業報告や計画についての他に、「松山子規事典」の刊行についても、ご説明しご審議いただくこととしておりますので、ご協力を賜りますようお願いいたします。

本会会員の増強は引き続きの大きな課題であります。会員各位の格別のご協力をお願い申し上げます。

平成28年度 決算書 (1)

自 平成28年 4月1日
至 平成29年 3月31日

収入の部 (単位=円)

費目	予算額	決算額	差引増減
繰越金	7,971	7,971	0
会費	500,000	699,000	199,000
普通会費	500,000	429,000	△ 71,000
賛助会費	0	270,000	270,000
寄付金	30,000	12,000	△ 18,000
補助金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑収入	162,029	158,039	△ 3,990
会誌・書籍売上金	90,000	151,555	61,555
広告料	60,000	0	△ 60,000
その他雑収入	12,029	6,484	△ 5,545
計	900,000	1,077,010	177,010

平成28年度 決算書 (2)

支出の部 (単位=円)

費目	予算額	決算額	差引増減
報償費	175,000	148,000	△ 27,000
謝礼金	140,000	113,000	△ 27,000
寄稿謝礼金	0	0	0
編集費	35,000	35,000	0
需要費	685,000	917,416	232,416
印刷費	500,000	679,944	179,944
通信費	50,000	68,982	18,982
通信費	15,000	9,600	△ 5,400
会議費	90,000	83,568	△ 6,432
事務費	5,000	43,898	38,898
備品費	5,000	23,384	18,384
慶弔費	10,000	2,340	△ 7,660
雑費	10,000	5,700	△ 4,300
行事補助費	0	0	0
予備費	40,000	0	△ 40,000
次期繰越金		11,594	11,594
計	900,000	1,077,010	177,010

(監査報告) 上記のとおり、諸帳簿は正確に処理されておりました。
平成29年 4月10日 監査 福井みどり
宇都宮 良治

「松山子規事典」の内容と編集について

編集委員長 平岡 英

子規事典は平成十八年に企画をして十一年になります。この事典の特長は松山子規会が企画し、執筆、編集をして刊行をするところにあります。和田克司委員長が一昨年の総会で発表をされた計画より一回り小さいB5版(週刊誌大)で四〇〇ページの半ばを想定しています。内容はあいさつお願の項目の「本篇」と併句、短歌、漢詩、新体詩などの子規作品抄からなり、本文に続いて「松山の方言」「全国の主な子規文学碑」などがあります。作業は必ずしも順調ではありませんが九月中の完成を目指しています。全国の小学校では併句を、中学校では「正岡子規」を学習していると聞きますが、一家に一冊、「松山子規事典」を置いて頂けるように願いたいものです。

「松山子規事典」その他について

事務局長 烏谷 照雄

1 「子規事典」案内冊子について
「子規事典」への推薦人氏名を記載、および一部事典内容紹介を兼ねて本日の資料として配っています。八月末までの「先行予約特典」(定価500円を300円、各消費税

別)を活用し、会員率先しての「子規事典」予約をお願いいたします。

2 「子規事典」想定予算・販売について

「子規事典」全体予算は未確定ですが、現状では収支七百万円が想定されております。収入の要はやはり会員による事典販売です。販売目標は七百五十冊と見込んでおりますので、会員お一人三冊以上の販売協力をお願いします。先の宣伝冊子について、推薦人の各団体等での積極的な活用をしていきたいと思っております。

3 子規会会員増強について

新規の入会呼びかけの文書を配布しております。「松山子規会」の一層の活動、財政的基盤の確保のためにも、新規会員の増強は必須の事項です。普段に会員の皆さんの努力をお願いします。

【議事】

会則により井手会長が議長となつて議案の審議が進められ、平成二十八年度の事業報告、会計決算報告が承認された。続いて平成二十九年度の事業計画、会計予算案について審議の結果、いずれも原案どおりに可決された。

平成28年度松山子規会事業報告書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
28年 4月	◇3日(日) 松山子規会第14回花見会 ◇20日(火) 平成28年度松山子規会理事 会総会並びに第879例会(子 規記念博物館) 講演・竹田美喜氏 「愚陀佛庵寄寓中に子規が 得たもの～漱石の助言と俳 句革新の論考」 子規会誌149号発行	10月	◇19日(火) 第885回例会(正宗寺) 講演・宇都宮良治氏 「碧梧桐と画家・水木伸一」 子規会誌151号発行
5月	◇19日(木) 第880回例会(正宗寺) 講演・嵐川武彦氏 「正岡子規と本田種竹」	11月	◇19日(土) 第886回例会(正宗寺) 講演・忽那哲氏 「子規と小鳥」
6月	◇19日(日) 第881回例会(正宗寺) 講演・二神將氏 「顕彰！愚陀佛庵所有者の 変遷と子規・漱石遺跡の保 存について」 卓話・戸梶元斎氏 「正岡子規の結核について」	12月	◇19日(月) 第887回例会(正宗寺) 講演・烏谷照雄氏 「時代を刻した俳人・松瀬 青々―子規・虚子・碧梧桐と ともに―」
7月	◇19日(火) 第882回例会(正宗寺) 講演・森愼吾氏 「子規と三津浜」 子規会誌150号(子規生誕 150年記念特集号)発行	29年 1月	◇19日(木) 第888回例会並びに新年懇 親会(石手公民館) 会長年頭挨拶 子規漢詩朗詠(杉本弘氏) 居合演武(森愼吾氏) 子規会誌152号発行
8月	◇19日(金) 第883回例会(正宗寺) 講演・近藤元規氏 「近藤我観について」	2月	◇19日(日) 第889回例会(正宗寺) 講演・中野匡子氏 「東洋城から露月への書簡」
9月	◇19日(月) 例会に先だち第115回子規 忌の法要と会員からの「俳 句」「短歌」「漢詩」「短詩・ 短文」の献詠(会員以外の 献句もあり) 第884回例会(正宗寺) 講演・今村威氏 「子規の“東京・松山比較 表”」	3月	◇19日(日) 第890回例会(正宗寺) 講演・松浦巻夫氏 「明治28年の正岡子規」

平成29年度 予 算 書 (1)

自 平成29年4月1日
至 平成30年3月31日

収入の部

(単位=円)

費 目	本 年	前 年	差 引
繰 越 金	11,594	7,971	3,623
会 費	700,000	500,000	200,000
普通会費	450,000	500,000	△ 50,000
賛助会費	250,000	0	250,000
寄 付 金	20,000	30,000	△ 10,000
補 助 金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑 収 入	128,406	162,029	△ 33,623
会誌・書籍売上金	120,000	90,000	30,000
広告料	0	60,000	△ 60,000
その他雑収入	8,406	12,029	△ 3,623
計	1,060,000	900,000	160,000

平成29年度 予 算 書 (2)

(単位=円)

支出の部

費 目	本 年	前 年	差 引
報 償 費	235,000	175,000	60,000
謝礼金	200,000	140,000	60,000
寄稿謝礼金	0	0	0
編集費	35,000	35,000	0
需 要 費	750,000	685,000	65,000
印刷費	450,000	500,000	△ 50,000
通信費	80,000	50,000	30,000
会場費	30,000	15,000	15,000
会議費	90,000	90,000	0
事務費	40,000	5,000	35,000
備品費	20,000	5,000	15,000
慶弔費	10,000	10,000	0
雑 費	10,000	10,000	0
行事補助費	20,000	0	20,000
予 備 費	75,000	40,000	35,000
計	1,060,000	900,000	160,000

平成29年度松山子規会事業計画書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
29年 4月	◇7日(金) 松山子規会第15回花見会 (石手公民館) ◇19日(水) 平成29年度松山子規会役員 会・総会並びに第891回例会 (子規記念博物館) 講演・今村威氏 子規会誌153号発行	10月	◇19日(木) 第897回例会(正宗寺) 講演・二神將氏 子規会誌155号発行 「松山 子規事典」刊行
5月	◇19日(金) 第892回例会(正宗寺) 講演・高村昌雄氏	11月	◇19日(日) 第898回例会(正宗寺) 講演・福井みどり氏 卓話・豊田渉氏
6月	◇19日(月) 第893回例会(正宗寺) 講演・佐伯健氏	12月	◇19日(火) 第899回例会(正宗寺) 講演・鳶川武彦氏 卓話・高橋俊夫氏
7月	◇19日(水) 第894回例会(正宗寺) 講演・近藤元規氏 子規会誌154号発行。	30年 1月	◇19日(金) 第900回例会並びに新年懇 親会(石手公民館) 子規会誌156号発行
8月	◇19日(土) 第895回例会(正宗寺) 講演・森慎吾氏	2月	◇19日(月) 第901回例会(正宗寺) 講演・渡部平人氏 卓話・西原ちづ子氏
9月	◇19日(火) 第116回子規忌の法要と献 句。 第896回例会(正宗寺) 講演・正岡明氏	3月	◇19日(月) 第902回例会(正宗寺) 講演・井手康夫氏

東洋城からの霽月への書簡

中野匡子



武蔵野大正六年十一月二十五日
左から二番目村上霽月
三番目松根東洋城

私は村上霽月の曾孫に当たります。私は以前に内藤鳴雪から霽月に届いた書簡を読みながら、鳴雪と霽月の与謝蕪村句集についての貴重なやりとりを話致しました。今回は松根東洋城から霽月に届いた書簡を御紹介し、俳諧での様々な人間関係を話出来たらと思います。霽月と東洋城とはとても親しくしていたので様々な俳人から届いた書簡の中で一番と言って良いほど沢山の書簡が霽月邸に残されています。夏目漱石や高濱虚子などの

書簡は全集などに翻刻されていますが、東洋城から霽月への書簡はほとんど手つかずで翻刻されていません。東洋城は明治十一年(1878)生まれで、父は宇和島藩城代家老、松根図書(ずしよ)の長男で、母は宇和島藩の殿様の次女です。霽月は明治二年生まれですので、九歳年上になります。東洋城が松山中学校四年の時、夏目漱石が英語の教師で松山中学校に赴任して来て英語を教わります。一年後、漱石は熊本に転勤してしまいましたが、東洋城は熊本の漱石に手紙を書いて俳句の指導をお願いします。それ以後東洋城は漱石に師事し尊敬を続けていきます。今回は東洋城書簡を二通紹介させて頂きたいと思っております。一通目の書簡は様々な俳人の人間関係が表されていて面白いと思います。書簡は明治四十三年八月三十日付けになっていて、その頃は虚子とも大の仲良しで何度も恒例の月見会をしています。明治四十一年に虚子から小説に専念したいからと、国民新聞の俳句の選者を東洋城に譲りたいと提案を受けます。一度は辞退した東洋城でしたが、虚子の考えは硬く引き受ける事になります。この書簡よりは少し後の事になりますが、大正五年、俳句を止めていた虚子が再び俳句を始め国民新聞の選者になり、二人は疎遠になっ て行きます。又、ホトトギスなどの日本派に対し河東碧梧

桐が台頭し、新傾向俳句を唱え始めた時期です。

二通目は大正八年九月二十日付けの書簡ですが、東洋城が四十一歳で宮内省を辞任した時の書簡を紹介します。この時は師と仰いでいた夏目漱石も大正五年に亡くなり、東洋城は霽月に精神的にも頼っていた事がよく分かります。

この書簡の後、九月二十一日、二十五日と続けざまに書簡が届くのですが、二十一日の書簡では

「手紙着次第御上京申候など御無理なこと申上げ恐縮尤も御相談願度義ハ??有之 只早い方結構なれどすぐにはあまり性急なりき秋の御上京はいつ頃かそれを早めて戴くことに出来れば仕合はせに候 せいぜい早くして下されていつ頃になるべくや・・・(略)」

と、少し心が落ち着き東洋城は「至急会いたい」と霽月に頼んだ事を後悔しつつそれでも会いたいと頼んでいます。

二十五日の書簡には

「半官半民にてはどうしても半端に御座候ゆゑに候 此度の事突然には相違なけれど小生としてハ必しも突然にあらず唯今当場の塩梅回復せず時々頭痛に悩まされること困却罷在・・・(略)」

と有り、官職と俳句活動の二足の草鞋の大変さと、体調不良の頭痛が酷かったようで、少し休みたいと訴えています。その頃の東洋城の心の葛藤が読み取れます。

では先ず最初に明治四十三年八月三十日付けの書簡からご紹介致します。

従而酷暑難堪者有之候。夏目先生之病氣は二十四日に吐血したる事が最悪しき経過の一にて、一時人事不省に陥りしも、注射にて恢復し、爾來

(翻刻)

御手紙、御葉書とも正に落掌。すべて行ちがひ、高浜にて御面晤かなはず残念のことに候。病人も思ひしより快方にて、何より仕合せに御座候。当方唯早にて雨乞千人踊をせずばなど、百姓達の嘆きに候。

静かなる由、毎日電報にて問合はせ居候。経過稍良好として昨日は電報参らず候。何しろ大患に御座候。若しもの事候ひては、我国の重大なる損失に候。是は一般の事、小生一身にとりては

実は小生事情ありて昨日職務を辞し本日許可に相成候の事に関し事情一切は御面会の上申し候得共 何卒御得案と下度候否を御一電と下度 紙外不尽 城 二十日午 霽月兄

明治二十八年の正岡子規

松浦 卷 夫

はじめに

「三十五年という短い子規の生涯の一年二年はいずれの年を見ても活動の全てが彫刻のそのように深く鋭く刻まれている。その中で特に明治二十八年という年が最も子規らしさが迸り出ている一年であると思う。」

四月 日清戦争従軍（近衛連隊附）記者として金州へ渡る。

八月 病後、松山へ帰り、漱石の下宿に五十余日寄寓する。

十二月 道灌山にて虚子に後事を託すが辞退される。

右の事象を、残された書簡を基に特に日清戦争従軍と所謂「道灌山」事件について考察してみたい。

1 従軍記者としての子規

明治二十五年十二月、子規は、陸羯南の経営する「日本新聞」に入社する。叔父加藤拓川の紹介で陸羯南に引き合わされてから子規は羯南を尊敬し、自分も将来、新聞記者に

一通目の書簡は少々長い書簡でしたが様々な人間関係が描かれています。

内容は霽月と東洋城は高濱港で会う約束をしながら何かの行き違いがあり、会う事が出来ずとも残念がっています。又宇和島の早にも触れ、百姓達が雨乞をせねばと嘆いていると報告しています。

夏目漱石の病気についての困惑を語りつつも最悪の状態からは徐々に回復しつつあると、心配しつつも一安心な様子で少し落ち着き始めた漱石の様子を報告しています。

又、統三千里で来松した河東碧梧桐を歓迎し接待している霽月に嫌悪感を露にしています。年上の霽月に気を使いながらも霽月の自重を心から願っています。

霽月は基本姿勢として、あまり偏った人付き合いでなく、誰とでも親しく接待する性格ですので、霽月の事を自分の見方だと信じ、人間関係に一途な一寸閑鎖的な所のある東洋城にとっては敵対していると思っている碧梧桐を接待している霽月に大変な憤りを感じたのでしょう。

二通目の大正八年九月二十日の書簡は東洋城の一大転機である宮内省辞任と言う事実本人自身が当惑している様子が描かれています。東洋城はこの時の心情の俳句を後日の書簡の最後に記しています。

木の実落ちてしかと打ちたる大地哉 城

*松根東洋城書簡（巻紙）個人蔵

（平成二十九年二月例会講演 会員）

なりたいたい思いを持っていた。入社に先立って五月には、前年夏の本曾旅行記「かけはしの記」を「日本」に連載し始め、六月には「頼祭書屋俳話」の連載を始めている。入社してからは「文界八つあたり」「はて知らずの記」「芭蕉雑談」等を連載し、「俳句時事評」も随時掲載している。翌二十六年二月からは文苑欄に俳句欄を設けて日本派俳句を掲載し始める。二十七年二月「小日本」が創刊され、子規が編集責任者となる。二十七年八月、日清戦争勃発。五百木瓢亭、召集され広島第五師団に属す。子規は結核性の持病を持ちながら、周囲の反対を押し切って従軍記者として戦地に赴くのである。その間の子規の心中を、二人の弟子（虚子と碧梧桐）に従軍決意表明の書簡を通して吐露している。

河東兼五郎君足下

高濱 清 君足下

「僕足下ト交遊僅カニ數歳而シテ友愛ノ情談心ノ交恰モ前世ノ契約ニ出ツルガ如ク 然リ僕ノ志ス所常ニ之ヲ開陳シテ以テ利害ヲ足下ニ問フ 其足下ニ望ム所亦之ヲ披發シテ以テ省慮ヲ請フ事ノ得失行ノ可否胸臆ヲ盡シ肺肝ヲ灑ギテ而シテ後ニ已ム 足下亦僕ノ躁狂ヲ咎メズ務メテ卑言ヲ容レラルルヲ辱ウス 歎喜禁セズ手舞ヒ足躍ラント欲ス 今ヤ日清事有リ 王師十萬深ク異域ニ入ル誠ニ是レ國家安

危ノ分ル、所東洋漸ク將ニ多事ナラントス 僕亦意ヲ決シ
一枝ノ筆ヲ挟ミ軍ニ從ハント欲ス 發程不日ニ在リ訣別ノ
情ニ堪ヘズ而シテ竊ニ想フ 足下僕ノ意ノ在ル所ヲ知ラズ
匪弱事ニ堪ヘズ中道ニシテ斃レンコトヲ畏ル、者ノ如シ
平生ノ交情既ニ篤シ今足下ニ對シテ一言ノ之ヲ辨スルナク
シテ可ナランヤ

僕ノ志ス所文學ニ在リ 文學二種有り 一ニ曰ク詩文小説
ヲ作爲スルナリ是レ雅事ニ屬ス 二ニ曰ク文學書ヲ編纂シ
文學者ヲ教育スルナリ是レ俗事ニ屬ス 詩文小説ヲ作爲ス
ル者ハ遍ク天下ノ景勝ヲ探リ博ク世間ノ人情ヲ究ムルヲ要
ス 景勝ヲ探リ人情ヲ究メント欲スレバ身ニ世務アルベカ
ラズ家ニ煩累アルベカラズ而シテ僕共ニ之レ有り 文學書
を編纂シ文學者ヲ教育スル者ハ幾多ノ材料ヲ蒐メ幾多ノ英
才ヲ集ムルヲ要ス 材料ヲ蒐メ英才ヲ集メント欲スレバ巨
萬ノ黄金ナカルベカラズ若クハ顯彰ノ地位ナカルベカラズ
而シテ僕俱ニ之ヲ缺ク 雅事ニ委センカ能ハズ俗事ニ任ゼ
ンカ亦能ハズ況ンヤ雅事俗事共ニ之ヲ兼ヌルヲヤ 知ラズ
孰レノ道ニ從ツテカ以テ素志ノ萬一ヲ爲スコトヲ得ン 僕
獨リ惑フ ——略——

僕適觚ヲ新聞ニ操ル或ハ以テ新聞記者トシテ軍ニ從フヲ
得ベシ 而シテ若シ此機ヲ徒過スルアラシカ 懶ニ非レバ
則チ愚ノミ傲ニ非レバ則チ怯ノミ 是ニ於テ意ヲ決シ軍ニ
從フ ——略——

皆に止められ候へとも雄飛の心難抑終ニ出發と定まり候
生來稀有之快事ニ御座候
小生今迄にて尤も嬉しきもの
初めて東京へ出發と定まりし時
初めて從軍と定まりし時
の二度に候 此上に猶望むべき二事あり候

洋行と定まりし時
意中の人を得し時
の喜び如何ならん 前者或ハ望むべし後者ハ全ク望ミ無し
遺憾ノ非風をして聞かしめば之を何とか言ハん 呵々
(明治二十八年)二月二十六日

良 三 殿

常規

後年(昭和十七年)高濱虚子は『俳句の五十年』の中で
「子規從軍を志願」と題して子規手ずから渡された旨記した
上で、從軍を通して貪欲なまでの子規の探索欲を読み取っ
ている。

遂に二十八年の三月には、子規も亦記者として從軍する
事になりました。この從軍記者になつて行くといふ決心が
ついた時分に、碧梧桐と私の二人を伴つて目黒あたりを散
歩した事があります。その歸りに子規は、一通の長い手紙

足下ノ學藝ニ於ケル昨歲抄以來僕ノ言ヲ爲ス歟々嗚々啻ニ
數百言ノミナラズ 足下亦應ニ僕ノ望ム所ニ副フベキヲ知
ル 相別ル、數月再會燭ヲ剪テ鶯巷ノ草廬ニ談スルノ日ハ
足下ノ學問文章必ズ人ヲ驚カスベキ者アルヲ期ス 僕若シ
志ヲ果サズシテ斃レンカ僕ノ志ヲ遂ゲ僕ノ業ヲ成ス者ハ足
下ヲ舎テ他ニ之ヲ求ムベカラズ 足下之ヲ肯諾セバ幸甚

明治二十八年二月二十五日

正岡常規 拜

半紙四枚に謹直な書体で決死の覚悟を示し後事を託した
ものである。『子規書簡集』(初山書店明治40・41刊)の
追記に「虚子云神田あたりにて別る、時『帰つてゆつくり
お読みや』と此書を手に渡された」という。翌二十六日に
は五百木良三宛てに次の書簡を送っている。

御手紙盡く到着拝誦致益御健勝大賀く

扱小生も先便申上候通りいよ、從軍に決し近衛附と略々
相定まり申候 同軍の廣嶋へ行くハ來月中旬にて出發ハ何
日とも知られず但し早速と存候 方面ハ未詳なれとも兎に
角山海關あたりハ思ハれ候 それやこれやにて近來忙し
く相成候

久松伯も近衛司令部副官 可全ハ讀賣新聞の名義にて隨
行可致さらバ小生と同行と存候 何彼二つけ都合よろしく
候

といふよりも寧ろ半紙を何十枚か綴ぢた、大きな草稿とい
つても良いのでありますが、それを、歸つてゆつくり讀ん
で見るといつて私たちに渡して途中から別れました。

歸つて碧梧桐と二人で、下宿屋の机の上でそれを讀んで
みますと、それには從軍するに當つての決心が縷々として
述べてありました。要するに、その理由は、はつきり子規
自身にも分らないが、たゞ何ものをかその從軍から得る事
を冀つて出かけるのであるといふ事が認めてあつたと思ひ
ます。こゝにもまた、子規の、何物でもかまはない、其所
に何物かをつかまへて、それに子規の抱負を託するといふ
意氣が見えてをるやうに思ひます。

『俳句の五十年』 高濱虚子

また河東碧梧桐は、『子規を語る』(昭和九年)で、子規の
出征が子規の寿命を縮めることとなり、もし從軍しなかつ
たならば、文学上でさらに大いなる功績を遺したのであるう
と無念がつている。

從軍前後

子規の從軍の動機は二月二十五日附の虚子と私に与え
た連名の告別文『書簡集』(子規全集)所載にも明らか
であり、その後に書いた子規の最後の小説「我が病」にも
審らかであつて、日清戦役の始まつた頃から、且暮子規の
熱望したところだつた。——略——子規の宿痾を患えてその無

謀を諫止した者もあつたが、それは子規自身の方がより以上に自分の健康を知っていた。当時の虚子はともかく、私如きはもう眼中に置いていなかったかも知れないが、それでもその胸中の秘奥を吐露して、後事を托するようなことを言つたのは、窃に死を決していた消息を語るものである。もし子規が従軍しなかつたならば、もつと余命を長うしたたであろうし、文学に多くの功績を残したであらうし、五体を拷問にかけらるる病苦も知らなかつたであらうし、公的にも私的にも子規の生活は、より遙かに意義の深いものとなつたであらうとも想像される。

——以下省略—— 『子規を語る』 河東碧梧桐

次に、日本新聞社主陸羯南と連名で大本宮に提出した「従軍願」と子規の「履歴書」を挙げる。

従軍願

愛媛縣伊豫國松山市

湊町四丁目十番地士族

正岡常規

慶應三年九月十七日生

右者此度近衛師團出征ノ場合ニ於テ新聞日本へ戦況通信ノ爲メ従軍仕度御許可ノ上ハ一切ノ御指揮確守仕候ハ勿論本

人身上ノ事ハ社主其責ニ任ズベク候此段以連署御願申上候也

右

正岡常規[㊦]

明治廿八年三月六日

日本新聞社主

願之通

陸 實[㊦]

明治廿八年三月廿一日

大本營副官部[㊦]

御中

履歴書

一 慶應三年九月十七日出生

一 明治十二年愛媛縣松山勝山小學校卒業

同年松山中學校二入學同十六年同校第一級ヲ修學中退學ス

同年出京同十七年東京大學豫備門二入學同廿三年第一高等

中學校（東京大學豫備門改稱）卒業同年帝國大學二入學文

科大學ニ在リテ國文學ヲ修ム同廿六年三月帝國大學ヲ退學

ス

一 明治廿六年四月日本新聞社二入ル

一 日本新聞社ニテ編輯ヲ擔任ス

一 作文一篇別紙添

日本新聞社

明治廿八年三月六日

正岡常規[㊦]

四月十五日、柳樹屯に上陸し、凡そ一か月の間、清国・遼東半島の劣悪な環境条件の下で従軍記者として活躍するいとまもないまゝに講和なり、帰国の船中で咯血、重体に陥つたことは「陣中日記」「従軍紀事」「病」にも書かれて

略

いる。 県立神戸病院に入院したのが五月二十三日。そして五月二十八日、夏目漱石より

「病氣見舞と松山での教師生活」報告の書簡（日付は五月二十六日）

拝呈 首尾よく大連灣より御歸國は奉賀候へども神戸縣立病院はちと寒心致候

長途の遠征舊患を喚起致候譯にや心元なく存候 小生當地着以來昏々俗流に打混じアツケラ閑として消光身體は別に變動も無之候 教員生徒間の折悪もよろしく好都合に御座候 東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返すべく、恐縮の至に御座候 八時出の二時退出にて事務は大概御免蒙り居候へども少々煩鎖なるには閉口致候 僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ 結婚 放蕩、讀書三者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舎に辛抱は出來

ぬ事と存候 當地の人間随分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿皆ノロマの癖に不親切なるが如し 大兄の生國を悪く云ては濟まず失敬々々 道後へは當地に來てより三回入湯に來り候 小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地恨らくは猶俗物の厄介を受け居る事を當地にては先生然とせねばならぬ故衣服住居八十圓の月俸に相當せねばならず小生如き丸裸には當分大開口なり

正岡 賢兄

（明治二十八年）五月二十六日 夏目金之助

2 子規、虚子を道灌山に誘い、後事を託す

明治二十八年十二月九日

十二月八日、子規は虚子の家を訪ねたが虚子は不在であつた。明朝、子規庵に來るよう手紙出す。九日、待てども虚子來ず。十一時頃虚子來る。共に昼食をとり、子規は、日本新聞社へ欠勤の連絡をして、虚子を道灌山へ誘う。自分の後継者として最も期待していた虚子は案に相違し

て、子規の要請に応えられないとの返答。信じていた虚子に裏切られて悲痛な絶望感。それが次に挙げる五百木瓢亭へ出した書簡の冒頭である。長文であるが引用する。

小生が心中は狂亂せり筆頭は混雜せり貴兄は氣を落ちつけて讀んでくれ給へ

揮復致候 一略 一こ、に一つ御報道可致事出来申候 單刀直入にては相分りかね候に付はじめより紋を逐て可申上候 小生が貴兄及非風と交際致居候際貴兄よりも非風の方文學上の才能ありと思ひ居候事は僅かの間に、非風は稍其正體を現はしかけ候故、貴兄に遠く劣り候は勿論迎もものにはなれずと一朝見すて申候 それと同じく碧梧虚子の中にも碧梧才能ありと覺えしは眞のはじめの事にて小生は以前よりすでに碧梧を捨て申候 併し虚子は何處やりとげ得べきものと鑑定致し又隨てやりとげさせんと存居種々に手を盡し申候 小生の身命は明日をもはかられぬもの小生の相續者は虚子と自ら定め置候 しかも此相續者のたしかなる事は小生自ら人を鑑定することの明を有せりと自ら待み居りし心にて相分り可申小生はどこまでも之を信じ貴兄をはじめ誰人も能く之を信じ申され候事と存候 併し人間の智慧程はかなきものは無之候 小生は今日只今二人となき一子を失ひ申候 小生をして人を觀るの明なからしめたる者は實に此一窮措

今朝起きて待てども待てども虚子來らず けふはやけになつて分類に従事致居候へども虚子の事のみ氣になりて拂取り不申 やがて虚子の來りたるは十一時頃なりしならん それより共に午餐をたうべ社へは不參の趣届置虚子を携へて道灌山に到り申候 小生未だ歩行に馴れず行程十町三四十分を費す やう／＼に茶屋に腰掛けて手詰の談判をはじめたり

君は學問する氣あり否や

千問萬答終に虚子は左の如く言ひきり候

文學者ニナリタキ志望アリ 併し身後ノ名譽ハ勿論一生の名譽ダニ望マズ

學問セントハ思ヘリ 併シドウシテモ學問スル氣ニナラズ人ガ野心名譽心ヲ目的ニシテ學問修業等ヲスルモノソレヲ惡シトハ思ハズ 然レドモ自分ハ野心名譽心ヲ起スコトヲ好マズ

つまり一言にしてつゝめなば文學者にならんとは思へどもいやでいやでたまらぬ學問までして文學者にならうとまでは思はずとの答なり 小生いふ

ソレナラバト我ト到底其目的ヲ同シウスル能ハザルモノナリ

虚子いふ

厚意ハ謝スル所ナリ 併シ忠告ヲ納レテ之ヲ實行スルダケノ勇氣ナキヲ如何セン

大高浜虚子に有之候 最早小生の事業は小生一代の者に相成候 三十有余年だに保ち得べからざる此一代にて相終り可申候

小生は纔かに創業の功を奏したる俳句類題全集とともに其運命の短きを歎じ申候 小生頭腦中に葬られ卒りし幾多の文學思想は水子ともならで闇から闇へ行き可申候 今さらの繰り言は誠に笑種に過ぎざれども鬱はらしに可申上候

小生須磨にありし時もしみじみと忠告する處あり且つ我が相續者は君なりと迄虚子に明言いたし候 虚子もや、決心せしが如く相見え申候 小生潜かに喜んで心に文學萬歳をとなへぬ先月歸京してつくづく虚子の挙動を見る又是舊時の阿蒙のみ 小生が彼に忠告せし處は學問の二字に外ならず候 學問といふ語が小生の口を出て虚子の耳に入りしこと數百度以上なるべし 須磨にての忠告は實に最後の忠告なりし覺悟也 而して虚子依然たり小生呆然として詠め居候

頃日多忙なり碧梧は入社早々醜聞を流しおまけに無學の評あり 新聞の益にはた、ず小生は獨り悶々たる折柄歡迎會送別會と暇なきを以て自分の仕事は一步も進まず稍氣違ひじみたる折柄最早堪へがたく相成り昨夜寒風凜々たるをものともせず虚子を訪ひ候ひしに虚子不在なり 小生の氣はいよいよいらちたり 直に手紙を發して今朝來れと命ず

叩命脈は全くこゝに絶えたり 虚子は小生の相續者にもあらず 小生は自ら許したるが如く虚子の案内者にもあらず 小生の文學は氣息奄々として命旦夕に迫れり 今より回顧すれば虚子は小生を捨てんとしたること度々ありしならんも小生の方にては今日迄虚子を捨つる能はざりき 親は子を愛せり子を忠告せり 然れども神の種を受けたる子は世間普通の親の忠告など受くべくもあらず 子は伶俐也親は愚痴也 小生は簡程にまで愚痴ならんとは自ら知らざりき 小生蕭然としていふ

忠告ヲ納レズトモ子ハ文學者トナラヌトハ限ラズ 我モ絶交スルトイフニハ非ズ 只普通ノ朋友トシテ交際シ今迄自

ラ許シタル忠告ノ權利及ビ義務ヲ拋棄スベシ

正直ナル者ハ最後ノ勝ヲ制ス 子ニシテ野心ナクンバ却テ無上ノ榮譽を得ンモ測ラレズ 併シ野心アル者ノ勝ヲ制スル事少カラヌモ亦俗世間の常態ナリ 子ニシテ野心ナクンバ零落シテ乞食非人トモナラヌトハ限り難シ

然レドモ是レ不遇ナリ 世間ノ惡キナリ 子ハ惡キニ非ズ 子ハ何處迄モ高尚ナリ 我等ノ及ブ所ニ非ズ 我ハ飽ク迄人物ノ上ニ於テ子ヲ崇拜ス 假令我ヲシテ無上ノ榮譽ヲ得セシメ子ヲシテ物ゾアハレニ零落セシムモ我ハ尚人物ノ上ニ於テ君ヲ崇拜セン

併シ我ハ文學者タラント欲スルナリ 他日我カ榮譽ヲ得タル時ハ是レ文學者タルヲ得シ時ナラン 其時ニ子ヲシテ若

シ零落シ盡サシメバ胸中ニ如何ノ文學思想アルモ最早世上ノ所謂文學者ニ非ルナリ 此時……此利那……子ハ人物ノ上ニ於テ我ヲ笑ハン……我ハ文學ノ上に於テ子ヲ冷笑セン 咄談話は途斷えたり 夕陽うしろの木の上に落ちて遠村模糊の裡に没し去り、只晚鴉の雁群と前後して上野に歸るあるのみ

一語なくして家に歸る 虚子路より去る さらでも遅き歩は更に遅くなりぬ 懐手のまぶらぶらと鶯横町に来る時小生が眼中には一点涙を浮べぬ 今後虚子は榮ゆるとも衰ふるとも

我とは何らの關係もあらず 去れども涙は何を悲しんでか浮び出たる。嗚呼正直なる者は涙也 義理づくにて久離きりたりとも繩かけられる子が可愛うなうて何とせう 虚子はどこ迄も神聖也 此後どこ迄も神聖なるべし 彼は文學者となるには餘り神聖過ぎたり 彼は終に文學者の材料となり卒んぬ

小生の文學は實を結ばずして草頭の露と消え去らん 虚子は終に小生をして人物の上に崇拜せしむべし 虚子は零落すればする程益神聖に高尚なるべし 小生は虚子が益高尚に益神聖になるを望むと同時に一点の愁涙は相浮び申候 若し零落して後神聖にも高尚にも無くば虚子は小生をして再び人を見るの明なきを證せしめたるものに可有之候 非風去り碧梧去り虚子亦去る 小生の共に心を談ずべき者唯

生存せんか爲には我と我名譽心を鼓舞するに至るこれ自然の勢、この邊は全く感情の作用に歸すべく必竟何の理屈も無之事に御座候

この理屈にならぬ理屈を最後として功名一件についてはこの後何の屁理屈をもちまらべ申まじく候 愚考するところによればよし多少小生に功名の念ありとも生の我儘は終に大兄の鑄型にはまること能はず我乍ら残念に存じ候へどこの點に在つては終に見棄てられざるを得ざるものとせん方なくも明め申候

唯併し乍ら功名一件外の御交際御教訓は如舊飽迄も奉願度くれぐれも念し申候 柵草紙一件未だ御問合被下候様の運びには至らず候やいづれ明後日參堂御意得可申候也

匆々頓首

明治28年12月15日 (小石川上富坂町二十三黒木方)

虚生

大正四年一月号の「ホトトギス」子規十三回忌記念号では、この道灌山事件後に關して、虚子が「子規の克己心、人間としての器量の大きさ、その後の虚子との關係」について評述している。

所謂「自立の決心愈々深くなれり」と言つた居士は何人

貴兄あるのみ 前途は多望なり文學界は混亂せり 源語は讀了せしや如何 俳句は出來しや如何 小説は如何 過去は如何 現在は如何 未來は如何 一滴の酒も咽を下らず 一點の醫も之を惜む 今迄も必死なりされども小生は孤立すると同時にいよ／＼自立の心つよくなれり 死はます／＼ 近きぬ文學はやうやく佳境に入りぬ 書かんと欲すれば紙盡く 喝ッ

明治二十八年十二月

升

瓢亭兄 凡右

虚子からは十五日付で、お詫びと心中の捕捉説明「生の我儘は終に大兄の鑄型にはまること能はず」の書簡が届いている。

先日は失禮仕候其節小生の野心全くなき様申し候ひしはちと言ひすぎに有之候様覺え申候

いはゞ未來の快樂と現在の快樂といふ事との兩者にあつては大兄は前者に重きを置き給ひ小生は後者に重きを置きたいはゞ度合ひの異なるものかと愚考仕候 小生とて生存する爲めに生活するものといふ考は無論有之候事故全く現在の快樂にのみ耽らんとするものには非ず明日明後日の非運を思ひて心細からざるに非ず又金衣玉食の望ましからざるに非ず他人を壓伏せん念なきに非ず他人を壓伏するは勿論

にも頼むところ無く萬事を自己一人の力で遣つて行かうといふ決心を堅くした。——略——

もう道灌山でお互に絶縁を宣言した間柄の余に對して居士は尚其事は忘れたやうに何かにつけて苦言を惜まなかつた。余を唯一の後繼者とする考は其時以來全く消滅したのであるが、併し門下生の一人として出来るだけ之を引き立てやうとする考は以前と少しも變るところは無かつた。

余はいつとも其事を思ひ出す度に人の師となり親分となる上には是非欠くことの出來ぬ一要素は弟子なり子分なりに對する執着であることを考へずにはあらぬのである。たとへば其は母が子を愛するやうなものである。——略——

之と同じ事で人の師匠となり親分となるにも第一に欠くことの出來ぬものは此執着である。

弟子や子分は氣儘である、浮氣である。決して師匠や親分が思つてゐる半分の事も思つてゐやしない。其弟子や子分の思ひ遣りの無い我儘な仕打に腹を立て、一々其に愛想をつかしてゐる日には一人は愚か半人の弟子も其膝下に引きつけて置くことは出來無いのである。爲すある師匠、爲すある親分は其點に於て執着——愛——を持つてをる。たとひ弟子や子分の方から逃れようとしても容易に其を逃しはしない。母の愛が子を抱きしめるやうに其一種の執着力はちつと弟子や子分を抱きしめてゐて、たとひもがき逃れようとしても容易に其を手離しはしない。さういふ點に於て子

規居士は十二分の執着——愛——を持つてゐた。たとひ門下生同志で互に他の悪口を言つて、何故あんなものを膝下によせつけるのかといふ風に其を排擠することがあるとしても、又さういふ人間が自分から遠ざからうとしても、居士は假にも自分の門下生となつたものは一人も半人も之を手離すに忍びなかつたやうである。之は居士の愛が深かつたともいへる。居士の慾が突張つてゐたともいへる。いづれにしても見様言様である。居士は嘗て余等が自己の俳句をおろそかにするのを諷めて斯ういふ事を言つたことがある。自分はたとひどんな詰まらぬ句であつても一句でも其を棄てるに忍び無い。如何なる悪句でも必ず其を草稿に書き留めて置く。其は丁度金を溜める人が一厘五厘の金でも決して無駄にはしないといふのと同じ事である。僅か一厘だから五厘だからと言つて其を無駄にするやうな考があつたら如何に澤山の収入のあるものでも金持になることは出来無い。其と同じ事で、たとひ如何に澤山の句を作る人でも、其句を粗略にして書きとめて置かないやうな人は迎て一流の作者にはなれない。さういふ點に於て私は慾張りであると。即ち此意味に於て居士は慾張りであつた。執着心があつた。愛があつた。

「ホトトギス」 子規十三回忌記念号 四 高濱虚子
居士の例の執着はこゝにも頭をもたげて來て、容易に極堂君をしてホトトギスから手を引かさしめなかつた。其處で

又、纏まつた讀書をするでもなく、ぼんやり日を過してゐるといふ事を述べました。

子規は「それではいかんではないか。」といつてにが／＼しい顔をしました。子規の身になつてみると、自分の後継者と心に定めたものが、ぼんやりして日を暮してゐる事を見るに忍びないことであつたのでありませう。殊に自分の死期が迫つてゐるといふ事を自覺してゐる子規にとつては、一日を空しくすごすといふ事は、大變な怠慢のやうな感じがしてゐたのでありませう。

一問一答をしてゐるうちに、子規の方も多少激してくれば、私の方も激してくるといつたやうな有様で、私は、子規の要求するやうにはとても自分はなれないといふ事を斷言するやうになりました。

おそらく子規も、それまで追ひつめるつもりではなかつたのでありませうが、いきほひの赴くところ、遂にそんな破目になつてしまひました。

私も、後継者といふのは自分には重荷だと竊かに考へないではなかつたのでありまして、曩きには辭退しかねて一應は承諾したものの、子規の委嘱に背くといふ事は大變苦痛ではありましたが、この際その窮屈な繩を解いて貰ひたいといふやうな考へもないではなく、遂に保養院での委嘱を辭退する事にしました。辭退するといつたところで、たゞ後継者といふ名前を辭退したばかりでありまして、その實

極堂君は翌年の夏頃迄兎に角續刊して來たのであつたが、其が三十一年の十月から余の手に渡つて東京に移さるゝことになつたのである。

ホトトギスが余の手に渡つてから居士と余の關係は又一變した。道灌山で一度破れた特別の關係が違つた形で結ばれることになつた。

「ホトトギス」 子規十三回忌記念号 四 高濱虚子

また「俳句の五十年」(昭和17年刊)では、道灌山への道中の様子、子規の虚子に対する期待、それに対する虚子の内奥、子規と虚子との血肉を分けた親子の情にも似た厳しい關係を彷彿させるのである。次に挙げる。

その年の十二月でありましたが、子規が私に來てくれといふ手紙が來ましたので、行つてみますと、子規は私を伴つて道灌山まで散歩に出かけました。散歩といつても、子規の腰の痛みは治らなかつたので、杖に縋つて歩いたのでありますが、その時分の道灌山といふのは、櫻の林がありまして、その櫻といふのも、冬でありましたから、全體古木になつて、僅にそこに一軒の茶店がありましたので、その茶店に休んで茶を飲みながら、子規は又改まつた調子で、私にその後の様子を訊くのでありまして。

私は、格別これといつて纏まつた研究をするでも無く、

子規の仕事を繼承してやつていくといふ事の上には、異存はなかつたのでありまして。

此時は已に私も俳句の方面の仕事をやつてゆく可く運命づけられてゐたといつてもいいのでありまして。たゞ、際立つた後継者といふやうな看板だけを取つて貰ふ方が、束縛されず、氣樂で良いといつたやうな考があつたのであります。

子規も若し從軍し大咯血をするといふやうな不幸な目に逢はなかつたら、もう少し健康人同様の生活を持續して行くことが出來たものと考へます。以前は、たとひ數年前咯血したことが既にあつたとはいへ、新聞人としても相當に活動することが出來た位でありましたが、此の大咯血後は終に腰痛を覺えはじめ四六時中病床の人となり、陰森な生活を送るやうになりました。のみならず子規の瓢亭に當てた手紙にもあるやうに、私が後継者を辭退してからは、誰をも頼まず、自分一人の力を頼み、殊に其命の短いことを思ふと、一分間も無駄に使ふことが惜しく、其勉強は今迄にも増して旺盛になつて來ました。従つて他のものが、おら／＼と、日を暮らしてゐるのを見ると齒痒くて仕方がなく、其ものが親しいものであればある程、之を氣に病み、其怠慢を責めました。

私は又極めて暢氣でありまして、唯なるやうになるのだといふ考へから、別に急ぐ氣にはなれませんでした。子規

は、私が餘り暢氣であるので、そんな風だと、自分が死んだ後、自分の墓に来て、首でもく、つて死ぬるのが落ちであらうといふやうなことを、瓢亭への手紙にいつてゐますが、眞逆そんなでもなかつたのであります。

尤もこれからさき、どんなことになつて、子規の墓に行つて首をく、るやうになるかそれは分りません。

『俳句の五十年』中央公論社昭和17・12・25刊

高濱虚子

おわりに

周囲の反対を押して、病弱の身を持つて従軍記者として清国へ赴くことを切望し、許可されると、「生来稀有之快事」と言い、

「小生今迄に尤も嬉しきもの初めて東京へ出発と定まりし時初めて従軍と定まりし時の二度に候」

と喜びを表し、勇躍出征したものの、貴重な体験と引き換えに病状の悪化、咯血激しく帰国するや否や神戸病院に入院加療。想像を絶する苦難を経験しながらも、三十三日間の「陣中日記」を初め、「病床日誌」を残していることにまず驚嘆の念を禁じ得ない。子規の子規たる由縁である。

道灌山での後継者問題についての虚子とのやり取りを通して二人の間に通う強い信頼の絆は肉親の情に勝る根太い

子規の新体詩

今村 威

『子規事典』編纂の過程で、新体詩を担当することになった。あらためて子規の新体詩を読んでみると、この分野でも子規は、新しい時代にふさわしい「詩」を探求し、さまざまな試みをしている。その方法は他の分野と同様に「温故知新」で貫かれ、今までの日本の詩歌の伝統を否定しようとする時流に流されることはなかった。子規が今日から見れば、幾多の魅力的な作品を創作しながら、日本文学史上において、新体詩人として名を残さなかつた原因もここにある。

一、新体詩の誕生と子規

明治十五年（一八八二）に、外山正一、井上哲次郎、谷田部良吉の共著で刊行された『新体詩抄』は、短歌俳句といった日本の伝統的短詩型詩歌を、近代には不向きなものと断定し、「西洋詩の模倣」をモットーに、翻譯詩一四編、創作詩五編を発表したものである。発想も用語も和歌風であるとの批判も大きかったが、日本近代詩の先駆けとしての功績は大きい。以後新体詩の詩型は、文語定型詩である。

ものを感じ取る。虚子は「大兄の鑄型にはまる。こと能はず」と反発しながらも、「母の愛が子を抱きしめるやうに其一種の執着力はちつと弟子や子分を抱きしめてゐて、たとひもがき逃れようとしても容易に其を手離しはしない。さういふ點に於て子規居士は十二分の執着―愛―を持っていた。」と述懐している。

子規は瓢亭への書簡の中で「義理づくにて久離切りたりとも繩かけられる子が可愛うなうて何とせう」と言い、「小生は孤立すると同時に自立の心つよくなれり」と自戒している。

参考資料

- | 書名 | 著者(代表) | 発行所 |
|----------------|--------|--------|
| 1 子規全集 | 正岡子規 | 講談社 |
| 2 俳誌『ホトトギス』 | 高濱虚子 | ホトトギス社 |
| 3 子規・遼東半島の三三日 | 池内 央 | 短歌新聞社 |
| 4 俳句の五十年 | 高濱虚子 | 中央公論社 |
| 5 友人子規 | 柳原極堂 | 博文堂書房 |
| 6 子規を語る | 河東碧梧桐 | 汎文社 |
| 7 子規の従軍関係新資料と私 | 海老原 惇 | 講談社 |

(平成二十九年三月例会講演 本会会員)

子規はこの『新体詩抄』を批判し、「文界八つあたり」の「(三)新体詩」で次の様に述べている。

「而して之を唱導せしは既に十年の前、山(ちゆざん・外山正一)巽軒(そんけん・井上哲次郎)先輩が新体詩抄なる書を著して世に公にせし時にあり。(中略)而して未だ数年を経過せざるの今日彼等が千歳不朽に伝へんと誇言せし数十篇の新体詩は、尽く雲散霧消して復昔日の拍手喝采の筈をも留めざるに至れり。無残ツ新体詩家は斃れたり。(中略)若し今後新詩人の出づる者あらば其人が詩人たるの性質を帯びざるべからざるは言ふ迄も無き事にして従つて高尚脱俗の詩想を有せざるべからず」

そして子規は新体詩第一号として「時鳥」(西詩翻譯)を発表する。

時 鳥 (西詩翻譯)

面白や春たちかへる

若緑杜のこずゑを

我が宿ととびかふなれば

佐保姫の音づれ伝ふ

使ひなるらん

若草のもえいでそめて

なを声を聞くもうれしや

めづらしきまろうどきませ
など共に祝ひめでばや
のどかなる春

書まねぶわらんべだちが
おひしげる杜の下道
たどりきてすみれつみつ
なの歌を聞きてしらべを
まねぶなるべし

豆の花開く頃しも
足引きの山路はるかに
谷の戸をいでてぞなのる
なれこそは一声たかく
春をつぐらめ

うつくしくめづべき鳥や
なの家はいつもみどりに
汝の空はいつもどかに
汝の歌は声もかほりて
いとどたへなり

我も亦つばさありせば

そなたの声は谷間を渡り

An annual guest in other lands,

年毎の客人として

Another Spring to hail.

新たなる春の訪れ告げるなり

子規は直訳でなく、「かつこう」を「時鳥」に、「桜草」を「堇」とし、日本人の感覚に親しいものに変えたほか、雅語を用い枕詞まで使って、日本の春の雰囲気を醸し出している。七五調の詩が多い時勢に反して、各節に「万葉集」の長歌の調べ（五七調）を用いているのは、かえって新鮮である。

明治二十二年（一八八九）森鷗外が中心となって発表した訳詩集『於母影』が、沈滞気味であった新体詩壇に新風を吹き込んだが、それより一年前に、優雅な春の情景を叙情豊かに訳出している子規の先見性や独自性に驚かされる。『於母影』は、西洋浪漫詩の叙情を、若い詩人たちに浸透させ、多くの新体詩人を生んだ。その頂点をなすものが島崎藤村の『若菜集』（明治三十年）である。子規はこれを読んで、次の様に論ずる。

若菜集の詩と画

升

新体詩を真面目に作る者は藤村なり。新体詩の詩想に俗氣を脱したる者は藤村なり。新体詩の字句の散文的ならざ

など共にとびやめぐらん
年毎に春を尋ねて
佐保姫と長き友垣
契りおかまし

（明治二十二年・竹の里歌）

「子規全集第八卷 漢詩 新体詩」三六三ページ
永らくこの原詩は不明であったが、二〇一七年四月四日の「愛媛新聞」に、田村七重氏が、これがスコットランドの詩人ジョン・ローガンの「TO THE CUKOO」（カクロウに寄せて）であることを確認したことが報じられた。四、五節を原詩と比較してみると、（訳は田村七重氏）

The schoolboy, wandering through the wood
学童は森を彷徨う
To pull the primrose gay,
鮮やかなる桜草を摘めり
Starts, the new voice of Spring to hear.
春告げる歌声聞えり
And imitates thy lay.
そなたの歌をまねるなり

What time the pea puts the bloom,
豆の花咲きそろう頃
Thou fleest thy vocal vale,

る者は藤村なり。若菜集収むる所長短数十篇尽く清楚哀婉紅涙迸り熱血湧く底の文字ならざるは無し。其の句法曲折あり変化あり波瀾あり時に奇句警句を見る。吾望を藤村に属す。然れども望を属すること多ければ責むる所多からざるを得ず。藤村吾言を聴くや否や。

藤村の詩皆叙情的なり。叙情或いは詩の本意ならん。但し叙景叙事を仮らざる抒情詩は変化少なし。蓋し若菜集第一巻二百頁人をして読まんとして読み了らしめざる者此に因るか。恋の多き春の多き霞の多き鶯の多きめしき悲嘆の声多き、其の多きは咎むる所に非ざれど一様の恋一様の春一様の悲歎多きを奈何せん。（後略）

（明治三〇年・「日本附録週報」）

「子規全集第一四卷 評論 日記」一九九ページ

明治二十九年九月、佐佐木信綱、与謝野鉄幹らが発起人となって発足した「新体詩会」に、子規も参加している。しかし新体詩壇全体については、散文的な作品が多いこと、叙情詩に傾き、叙事詩が少ないことに、物足りなさを感じている。そして自らも作詩を試み、その多くは『竹の里歌』に収められた。明治二十一年の西詩訳「時鳥カックー」を初めとして、明治二十三年四編、二十四年二編、二十八年一編、二十九年二七編、明治三十年四八編、明治三十一年七編、明治三十二年二編、明治三十四年二編、年不詳四編、計九八編を作っている。

叙事詩の例

「音頭の瀬戸」

竹の里人の名で、「日本人」第二八号(明治二十九・十・五)に発表された。広島県の宇品港から、海の難所知られる音頭の瀬戸を通って、故郷の松山三津浜港までの船旅を歌う。一節は七五調五行からなり、全部で一七節の長詩である。最初の六節は、平清盛の故事を中心に、音頭の瀬戸の地理歴史を、音頭の瀬戸の実景を含めて述べる叙事的な部分である。第七節からの十節は、八月の海の天候急変による、遭難寸前の船内の危機感を詠む。第十節では嵐の海的情景を大入道の出現に喩えるなど、多分に幻想的空想的であり、この部分はフィクションと思われる。最後の一七節は、嵐を乗り切って、全員無事三津浜港に到着した喜びを詠む。子規は明治二十八年八月二十四日、宇品を發つて三津浜に向かつているが、松山到着を知らせる二十五日付け河東碧梧桐宛の葉書には、「広島を経て昨夜三津着 今朝松山へ乗りこみ申候」とあつて、遭難のことは一切書かれていない。

音頭の瀬戸 竹の里人

宇品の港船出して

四国に渡る通ひ路の

呉、江田島と打ち過ぎて、

波も静かに風もなく

音頭の瀬戸にかゝりけり。

兩岸迫りて海狭く、
崖高うして松疎なり。

響灘より押し来る
潮の流れ急にして
少しも船は進み得ず。

昔入道相国の
入目を返すいきほひは、
山をつんざき鳥を断ち
人の力に此瀬戸を
忽ちにして切り開く。

切つて落とせば安芸の海
伊予の海へと続きつつ
難波に上り西国に
下る小舟も大船も
ここを過ぎぬはなかりけり(以下略)

〔「竹の里歌」〕「日本人」・明治二十九年)

〔全集第八卷 漢詩新体詩〕四〇四ページ

叙事的抒情詩の例

「父の墓」

の子なりけり。』の言葉を繰り返して終わる。押韻にも配慮して、各節四行目ごとに音を揃えている。第一節はウ列音、第二、三、四節はイ列音である。

父の墓 竹の里人

一

父の御墓に詣でんと

末広町に来て見れば

鉄軌寺内をよこぎりて

墓場に近く汽車走る。

石塔倒れ花凋む

露の小道の奥深く

小笹まじりの草の中に

荒れて御墓ぞ立ちたまふ。

見れば囲いの垣破れて

一步の外は島なり。

石鉄風来るなへに

粟穂御墓に触れんとす。

胸つぶれつつ、見るからに、

あわてて草をむしり取る

わが手の上に頬の上に

飢ゑたる藪蚊群れて刺す。

二

櫛を手向け水を手向け

「日本人」第二五号(明治二十九・八・二十)に発表された。明治二十八年子規は、従軍記者としての職務を終えて帰国の途次大略血して、神戸や須磨で療養する。八月小康を得て松山に帰省したが、十月帰京するに当たり、法龍寺見性院の父の墓に詣でている。その時の思いを詠んだ長詩である。全四節で構成されているが、各節は七五調一六行からなる。さらに一六行は、四行ずつの四部からできて、緻密に構成された詩である。第一節は、墓地を鉄道が横切る激変への驚き、父の墓のひどい荒れ様、側の島から伸びた粟の穂が、石鎚おろしに墓に触れようとするのを見て、胸のつぶれる思い、藪蚊に刺されながら、急いで草をむしる様が詠まれる。第二節は、父の墓前に水を手向け、涙を流し、幼時祖母に教えられた経を唱え、その時から二四年の間梢を鳴らし続けた秋風の音に、故郷を離れている故とはいいながら、先祖祭りもままならない悲しみを「父上許したまひてよ。われは不孝の子なりけり。」と吐露する。第三節は、家名を挙げようと、勉学に励んだことも未だ成果を見ず、母親への孝養も不十分であり、病気に冒されて、療養の身となつては、未来に大事を為すことも覚束なく、ふたたび故郷を去れば、再びここを訪れることも出来まいと、絶望の思いを述べる。第四節は、自分が去つて後の墓の荒廢を案じ、帰京すればこれが父との今生の別れになるか知れぬと告げ、「父上許したまひてよ。我は不孝

合掌してぞかしこまる。

涙こぼれぬ、父上と

我を隔つる其土に

いとけなき時婆々君に

此御墓前にて習ひたる

念仏一遍その如く

しづかに唱へ終りたり。

人につれられ詣で来にし

昔覚えて、墓の木に

二十四年の秋の風

木末動かす音悲し。

旅に住む身は年々の

祭も心のままならず。

父上許したまひてよ。

われは不孝の子なりけり。(以下略)

〔子規全集第八卷漢詩 新体詩〕三七九ページ。

二、子規の新体詩の特徴

新体詩の特徴の第一は、明治三十年に発表した「明治二十九年」が、明治二十九年に起きたニュースを「三浦出獄」「政党合同」「朝鮮紛乱」「従軍記章」「板垣入閣」など二編の時局を素材にした叙事詩から構成されているように、叙

人すがる屋根は浮洲のたぐひかな

(「日本」・明治三〇年)

〔子規全集第八卷漢詩 新体詩〕四五五ページ

子規の新体詩の特徴の第二は、押韻の試みが行われていることにある。三十年の「老嫗某の墓に詣づ」では、二行ごとに同音で韻を踏ませている。

老嫗某の墓に詣づ 竹の里人

われ幼くて恩受けし

姥のなごりの墓じるし、

せめては水を手向けんと

行くや、湯月の村の外。

昔辿りし田の小道、

寺を廻りて埋葬地、

三年過ぐればこは如何に、

墓満ち満ちぬ、尾に谷に。(以下略)

(「日本人」明治三〇年)

〔子規全集第八卷漢詩 新体詩〕四八五ページ

子規は押韻のために、「韻さぐり」(全集第二十卷研究編著)に所載、国語学者山田忠雄が「語末辞書」と呼んだように、同音で終わる単語集を編纂するほど、情熱を傾けている。

韻さぐり

あ

事詩が多いことである。

明治二十九年 子規子

○板伯入閣

自由よ。汝はもろともに

轆轤不遇のはた年を

過ごせし友を失ひき。

偽り多き其友は

汝を欺き束縛の

奴隸と汝は売られけり。

あはれよ自由。しかはあれ

安かれ。汝を繋ぎたる

鉄の鎖は誠ある

神に解かれん。国民は

汝を助けん。ああ自由。

鴉の頭白くなる

日をたのむとも中々に

頼むべからず英雄は。

花守の花に背きし恨みかな

○三陸海嘯

太平洋の水湧きて

奥の浜辺を洗ひ去る

あはれは親も子も死んで

屍も家も村も無し。

鴉カア 寒鴉 鳴蛙

亜細亜

太阿

唾 盲唾 ノア

白亜

塗鴉

ヒアく、洒く、

ああ(嗚呼) マア サア ヤア ハア

〔子規全集第二〇巻 研究編著〕五一ページ

このことは、子規が、新体詩は朗唱すべきものと、考えていたからである。

子規の新体詩の特徴の第三は、新体詩を日本の詩歌の伝統につながるものと考えたことである。

子規は、明治三〇年「俚歌に擬す」と題する六編の詩を発表する。その前書きに「俚歌の中に子守歌、及び小児の謡ふ歌は言葉ひなびたれども面白き節少なからぬを、小学校に唱歌を教へしよりやうやうに唱歌行れて俚歌は跡を絶たんとす。なかなか唱歌よりも俚歌に文学趣味多きを思ふに其全く世に忘れんことも口をし、此頃幼き時に覚えたる歌の忘れたるを老人に聞き正して書いてつけ見るに、一人興に入りて、終に其口まねをそころみける。吾は韻語の自然ならぬを笑ふ、人は事の益無きを笑はん。」と記して

いる。

俚歌に擬す 竹の里人

其一

ねんねんやをころりや。

ねんねの坊やは誰が子ぞや。

お城の上の星の子か、

南の海の河豚の子か。

坊やを産んだ母の子ぞ、

坊やを抱いた母の子ぞ。

〔日本人〕明治三〇年

〔子規全集第八卷漢詩 新体詩〕五二九ページ

斎藤茂吉は、著書「正岡子規」一一ページに「俚歌に擬す」について、他の新体詩人とは鮮明に違つて述べている。

竹久夢二も自作の詩の一部にこの詩を引用している。

子規は、日本の詩歌の伝統を、新体詩によって、新時代にあわせて発展させようとしている。それは、子規の新体詩のほとんどが、短歌集「竹の里歌」に収められ、ほとんどに、短歌と同じ号「竹の里人」を用いていることにも表れている。これらの姿勢は、当時の詩壇の風潮と異なり、詩壇からは、注目されなかった。

〔富士山〕(三十二年)が、明治二十四年に東京音楽学校刊行の『中学唱歌』に採用されており、作曲されて歌われ

あるが、子規が原詩の詩情を大切にしながら、日本人の真情にそれが正しく伝わるように、また日本語の持つ美しさが發揮できるように苦心していることが知られるであろう。子規が詩壇から批判されながらも、押韻にこだわったのも、日本語の調べの美しさを追求しようとしたからである。子規の新体詩は、音読して味わわなければならない。

子規が戦地を体験し、さらに生死の境をさまよつた直後の明治二九年から、新体詩の創作が一気に熱を帯び、作品数ばかりでなく、長篇の詩が多くなっている。その最初の作品「鹿笛」(『子規全集 第八卷 漢詩 新体詩』三七二ページ)は、近世の俳人高桑蘭更の発句「鹿笛に谷川渡る音せわし」に触発されて創作した三節全一〇二行に及ぶ長詩である。これは獵師の鹿笛によっておびき寄せられ、仕留められた雄鹿と、その身を案ずる牝鹿の心中を詠んだ物語詩、劇詩である。ここに子規は、独特の世界を築こうとしている。今後、子規の新体詩についての研究は、新しく始めなければならない。それによって、子規の新体詩の未知なる魅力が発見されると信ずる。

(平成二十九年四月例会講演 副会長)

ている。また、「花売る歌」と「月と兔」が、市村公子氏によつて女声三部合唱に作曲され、平成十九年、松山で初演された(楽譜はカワイ出版)。

三、子規の新体詩の再評価

〔子規全集 第八卷 漢詩 新体詩の七二〇ページに昭和四一年一〇月二日の「愛媛新聞」に発表された蒲池文雄氏の、子規の新体詩についての評論が紹介されている。

「新体詩は、漢詩や、和歌、俳句と手を切り現代の言葉で自由長大な形を用い、現代の詩想を盛る使命をもって生まれた。(中略)新体詩という新しいジャンルの持つ意味は、端的に言えば封建的な人間観を破り、人間感情の解放をはかる器としての詩ということである。藤村の『若菜集』(明30.8)は、まさにそういう新体詩の意味を具現したものととして現れ、世に迎えられた。しかるに、子規は、新体詩が手を切ろうとした俳句のメカネをかけて詩を作ろうとした。」

たしかに子規の新体詩創作は、明治三十四年の二編をもって終わり、世に広く受け入れられなかったことは事実であるが、これをもって子規が新体詩に挫折したと見ることは出来ない。子規の最初の新体詩の作品である翻譯詩「時鳥」は、新しく発見された原詩と比較して分かることで

〔短信〕坪内稔典さんと子規

今村 威

坪内稔典さんは若き日、パチンコで大勝ちして得たお金で、古本屋にたまたまあった『子規全集』全巻を購入し、これを契機に、子規の全作品を讀破して、子規の虜となられたそうである。岩波新書『正岡子規 言葉と生きる』のあとがきに、坪内さんは「子規の言葉をまず挙げ、その言葉を読みながら書く、あるいは聞きながら書く、というスタイルが決まったとき、急に楽しく書けるようになった。」と記している。

去年から始まった愛媛新聞社主催の坪内さんによる特別講座「子規とその仲間たち」も、まず子規の言葉を紹介し、その言葉に耳を傾けるように進められる。聴講生ひとりひとりの声も大切にされる。

坪内さんが代表の雑誌「船団」には、若い世代の子規研究者や俳人たちの声が生き生きと記されている。書評欄に坪内さんの『モーロクのすすめ 10の指南』(岩波書店)があった。「老いることを楽しもう」という本だという。しかし、松山で発行されている「子規新報」の坪内さんの評論は、いつも刺激的である。また、『坪内稔典百句』(創風社出版)を読めば、個性と時代性を重視した子規の精神が感じられる。

【短信】

松山子規会に「伊予銀行地域文化活動助成金」贈呈

平成二十九年四月二十六日（水）、東京第一ホテル松山で「伊予銀行地域文化活動助成制度・助成金贈呈式」が開かれた。当日は松山子規会から井手康夫会長が参列し、伊予銀行・大塚岩男頭取から助成金が贈呈された。

贈呈証書には

「貴団体は七十年以上の永きにわたり正岡子規の研究および顕彰活動を継続しておられます（中略）、その活動は愛媛の地域文化発展に貢献すると共に未来への貴重な財産となるものであります（後略）」

と記載され、松山子規会の日常の活動に加え今回の助成対象として

「子規生誕百五十年記念―『松山子規事典』出版」

が明記され、今秋発行の「松山子規事典」への支援が大きく位置付けられている。

なお、松山子規会には同助成制度の第三回（平成五年五月）で、「松山子規会創立五十周年記念事業」（和田茂樹会長）を対象として助成金が贈呈されている。

（事務局長・烏谷照雄）

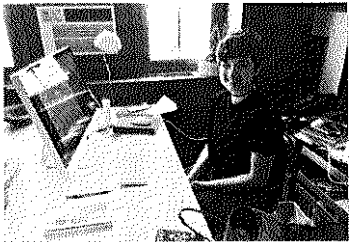
松山子規会の皆様へ

ボストン大学 キース・ヴァインセント

貴会の研究誌「子規会誌」を賜り、また今年度の総会にて、学術使用に限り著作権許諾の採決をいただき改めて御礼申し上げます。

ボストン大学図書館に移管される全資料のインターネット上での公開に向けて、その進捗状況をご報告いたします。

現在資料の約三分の一の読み取り操作を終え、子規会誌は「Open BU」というアーカイブサイトでまもなく公開される運びとなります。スキナーで読み取ったデータを文字化する方法をとっており、キーワードを入力すれば自由に全資料から必要な情報を得ることが出来るようになります。また、他のインターネットサイトからも検索が可能になるように、図書館が準備を進めています。

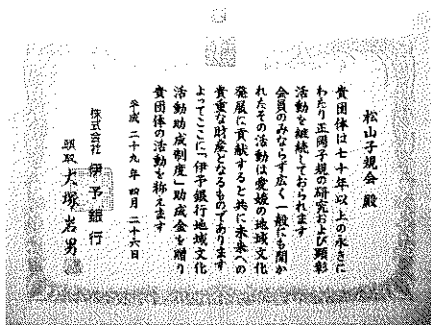


ヴァインセント研究室のレベッカさん

・大塚岩男頭取から贈呈状を受ける井手康夫会長



・助成金・助成証書



「子規会誌」第150記念号にある子規会と会誌の沿革に関する項目は、研究生のレベッカさんによる英語翻訳も完成しアップロードします。貴会の歴史は貴重な情報そのものと存じております。

貴会と「会誌」の紹介文は次のようにいたしました。

「子規会誌」は松山子規会の発行する研究誌で、正岡子規の研究を推し進め、その成果を掲載するものである。正岡子規（1867―1902）は近代日本文学を発展させ俳句の近代化に大きな功績を残した。松山藩の武士の家に生まれ、16歳で上京し勉学の後、1892年日本新聞社に入社し記者として活躍するも、その10年後の9月19日長く苦しめられた結核のため死去。24000もの俳句を作り、多くの優れた俳書や評論を残す。

松山子規会は1943年松山で子規の同世代の親友であった柳原極堂が創設、以来毎月19日に例会を開催し子規に関する研究を続けている。「子規会誌」はその研究成果を1979年4月から継続して季刊され、子規に関する豊富な研究はもとより夏目漱石、高浜虚子、河東碧梧桐や内藤鳴雪など子規周辺の人々の研究も掲載されている。子規に関する研究書の論考や子規自身の研究の考察と書目・資料も含まれている。なお、「子規会誌」発刊以前の研究記録

は『子規遺芳』『子規敬慕』（松山子規会叢書）に収録されている。

ボストン大学は松山子規会の許可を得て、全世界の研究者や俳句愛好家にむけ当該会報誌に自由にアクセス出来る拠点を作るものである。

ボストン大学が責任を持って資料並びにインターネット上の情報管理と運営をいたしますので、今後発刊される会報誌をご惠贈賜りますようお願い申し上げます。貴会のみならずのご発展を祈念しております。

2017年5月吉日

（翻訳 田村七重）

【短信】伊予銀行味生支店ロビー展

「子規の見た松山」写真・資料

—「松山子規事典」から—

松山子規会では子規生誕150年を記念して、「子規事典」を本年10月に全国で初めて出版いたします。

この度の展示会は、その「子規事典」に掲載される明治から大正にかけての松山の景色・風景、私たちの祖父、祖母の時代の松山の姿を事典発刊に先駆けて皆さんにご覧い

たできます。

また併せて、会場には、「松山子規会」の歩み・活動の記録として最近の「子規会誌」・「子規会叢書」などの展示、今秋発刊の「松山子規事典」の案内もしています。

◇会期 平成二十九年六月二十一日（水）—七月

三十一日（月）土・日曜日を除く毎日、午前九時—午後三時

◇ところ 伊予銀行味生支店ロビー

（新空港通り・松山市北斎院町643-1）

◇展示内容

①明治、大正時代の松山の風景などの写真

—今秋発刊の「子規事典」（松山子規会編）から

②「松山子規会」の歩み・活動の記録

・最近の「子規会誌」の展示

・「松山子規会叢書」子規会刊行図書展示

③「松山子規事典」案内冊子（お持ち帰り可）

④その他

◇入場無料

◇主催 松山子規会

◇協力 伊予銀行味生支店

*お問い合わせ先

伊予銀行味生支店 電話089（952）3737

【短信】

○「子規事典」編集記録6

十二ページの魅力的なグラビアが出来ました。ページ数は四七〇くらいの見込みです。索引が出来れば最終段階です。和田克司氏の三回忌（七月十四日）も過ぎました。完成すればご霊前に捧げたいと思います。発行日は奥付では子規生誕の十月十四日としています。

（編集委員長 平岡 英）

○新入会員の紹介

- ・豊田 渉 松山市久米窪田
- ・武内哲志 松山市正円寺
- ・永江孝子 松山市喜与町
- ・世良謙介 松山市鷹子
- ・島川充子 松山市一番町

ご入会いただき、ありがとうございました。今後のご活躍をご期待申し上げます。

○正岡明氏所蔵の資料展示

子規・漱石生誕百五十年を記念して、正岡子規研究所主催の正岡明氏所蔵の資料展「至芸の邂逅展」が六月二十九日から七月二日まで松山市立子規記念博物館その他の会場

で開かれた。加藤拓川関連資料を中心に、子規、漱石、律の資料、子規庵における八重と律の写真等、貴重な資料が展示された。

○松山子規会役員会開催

六月八日（木）十五時より『松山子規事典』の内容や構成についての最終的な審議、同事典の販売活動のあり方等についての討議や意見交換があった。

○訂正

前号（一五三号）に次の誤りがありましたので、訂正します。

・表紙裏 下段9行

《訂正前》「終着心」

《訂正後》「執着心」

〈松山子規会は次の皆様に賛助会員としてご支援いただいております〉

(敬称略・順不同)

・伊予鉄道株式会社	〒790-0012 松山市湊町4丁目4-1	TEL089-948-3222
・株式会社愛媛銀行	〒790-0878 松山市勝山町2丁目1	TEL089-933-1111
・愛媛信用金庫	〒790-0002 松山市二番町4丁目2-11	TEL089-946-1205
・生活協同組合コープえひめ	〒790-8543 松山市朝生田町3丁目1-12	TEL089-931-5201
・四国電力株式会社	〒790-8540 松山市湊町6丁目6-2	TEL089-946-9706
・三浦工業株式会社	〒799-2696 松山市堀江町7番地	TEL089-979-7013
・学校法人河原学園	〒790-0001 松山市一番町1丁目1-1	TEL089-943-5333
・株式会社サンメディカル	〒798-0013 宇和島市御幸町1丁目2-13	TEL0895-25-2880
・梅錦山川株式会社	〒799-0123 四国中央市金田町金川14	TEL0896-58-1211
・えひめ洋紙株式会社	〒791-8036 松山市高岡町455-1	TEL089-973-9200
・医療法人聖光会鷹の子病院	〒790-0925 松山市鷹子町525-1	TEL089-976-5551
・長谷川歯科医院	〒791-8022 松山市美沢2丁目6-23	TEL089-925-7600
・久米病院	〒790-0924 松山市南久米町723	TEL089-975-0503
・南海プリント株式会社	〒790-0051 松山市生石町449-3	TEL089-943-0770
・有限会社日新商会	〒791-8044 松山市西垣生町802-12	TEL089-971-6633
・株式会社時の名所 ふなや	〒790-0842 松山市道後湯之町1-33	TEL089-947-0278
・大和屋本店	〒790-0842 松山市道後湯之町20-8	TEL089-935-8880
・株式会社四国道後館	〒790-0841 松山市道後多幸町7-26	TEL089-941-7777
・不二印刷株式会社	〒790-0054 松山市空港通2丁目13-10	TEL089-973-1266
・巴製菓株式会社	〒790-0842 松山市道後湯之町13-7	TEL089-941-3452
・紀の国屋食堂	〒790-0012 松山市湊町5丁目3-5	TEL089-945-1309
・癸丑吟社	〒790-0923 松山市北久米町1161-1	TEL089-976-6432
・古書 猛牛堂	〒790-0854 松山市岩崎町2-6-34	TEL089-948-8137
・豊島内科	〒790-0844 松山市道後一万3-7	TEL089-924-2936

(平成29年6月末日現在)

子規会誌 第二五四号

(会誌季刊 四、七、十、一月)

発行日 平成二十九年七月十九日

発行 松山子規会・会長 井手康夫

編集 松山子規会・編集部 渡部平人ほか

印刷所 不二印刷株式会社

電話 〇八九一九七三―二六六

子規会誌希望・入会等連絡先

松山子規会事務局・高川武彦

〒七九〇―〇九三

松山市北久米町二六一―

電話 〇八九一九七六―六四三三

〇二六二〇―七一一八六八

(定価・四一〇円)

郵便振替

©松山子規会